



学生時代、「本当に困っている無医村」を調査するため四国の山中に入った(中央の腕組みしている男性が本人)

無医村が育んだ医師への志 脳死移植 告発にも逃げず

終

戦の年、広島県熊野村(現・福山市)で生まれる。まさに無医村だった。家は村でも隅っここの山の中。小学校低学年時代は先生が1人だけの分校通い。「山で川で大自然を相手にいつも遊んでいた」

4年生から本校に通い始めるが、「分校の山猿」ことからかわれ友達はずっと。高校時代も他に交通手段がなく、特別にバイク通学。部活動もせず独りで帰る日々。次第に「地域に医師がいてくれたら」との期待を感じ、医師を志す。幸い理系の勉強は得意で大阪大医学部に合格した。

都会の華やかなキャンパスライフにはなじめなかった。「このメンバーで京都に遊びに行こう」といった会話を聞くと、「なんで京都なの?」なんてこのメンバーの「なんで思ってしまうんです?」周りからすると付き合いにくいタイプだったに違いない。

空気は読まずに物事を真剣に考える。こんな性格がいつも成功につながるわけではない。大阪大の医学部第二外科教授にまではなったものの、医学部長にも付属病院長にもなれなかった。推薦されて候補者にはなるが、票読

みもせずに持論を述べるだけだから、教授会の投票で何度も落選した。

「選挙で勝つことではなく、本来こうあるべきだと主張を通すことが目的なんです」と門田さんは気にしなかった。ぶれなかったことは結局、その後につながっていく。

医師としてぶれなかったことの一つには臓器移植への思いもある。医学生時代、肝硬変で亡くなる患者と触れ合ったのがきっかけで移植医を目指した。治すには移植しかなかったからだ。

ところが1968年の日本初の心臓移植手術が脳死確認などの点で大きな批判にさらされ、脳死移植がストップしてしまう。それでも道を迷わず、米国内にも留学して研さんを積んだ。

そのうちに日本では生きている人からも取れる肝臓に着目した「生体肝移植」が盛んになる。ここでも門田さんは「本来の移植は脳死移植」とこだわる。「確かに目の前の肝臓の患者は救える。でも、それで脳死移植が遅れば、心臓や肺の移植で救えるもっと多くの患者が先送りになる」。生体移植には手を付けず、脳死からの移植を実現する運動を進めた。

実は臓器移植で殺人罪に問われたことがある。脳死移植を認める法律はまだなかったが、1991年に政府の調査会が「脳死は人の死」とする見解を出したことを受け、脳死状態の人のおなかに管を入れるなどの準備をしておいて心臓が止まった瞬間に臓器を取り出すとしたのだ。臓器に病気が見つかったら最終的に移植は断念したが、脳死移植反対派から告発された。

「起訴か不起訴か、はっきりしてほしかった」のに、検察は態度を保留。97年、臓器移植法が成立してやっと「不起訴」が決まる。「こんなことでは物事は進まない。腹立たしいことやった」。今も日本の脳死移植は海外に比べ遅れている。「放置してはいけない」という。

門田さんが最近、心を砕くのは日本医学会のあり方。明治期に創設され、現在は129もの学会が参加して医学の発展を目指している。ただ、戦後に日本医師会の中の一組織となり、社会的な存在感は薄い。「日本の健康水準向上のためにこの組織は何をするべきか」。新たな思索が始まっている。

山口聡
井上昭義撮影